

Press Release | プレスリリース

「田中敦子ーアート・オブ・コネクティング」展

Atsuko Tanaka. The Art of Connecting

2012年2月4日 (土) – 5月6日 (日)



田中敦子《電気服》1956年 (1986年再制作) 所蔵・写真提供：高松市美術館 ©Ryoji Ito

開催概要

東京都現代美術館では、国際交流基金、イギリスのアイコンギャラリー、スペインのカスティジョン現代美術センターとの共同企画による「田中敦子－アート・オブ・コネクティング」を開催します。

田中敦子（1932－2005）は金山明の助言で、抽象表現へと進み、コラージュによる《カレンダー》を制作をはじめ、このときより繊細さと力強さが共存する独自の感性を発揮します。その後、金山とともに吉原治良の指導のもとに結成された前衛団体「具体」に参加。20個のベルが順に鳴り響く《作品》（ベル）（1955年）、9色の合成エナメル塗料で塗り分けられた管球約100個と電球約80個からなる《電気服》（1956年）ほか、彼女のパフォーマンスやインスタレーションをとりいれた表現は具体のなかでも突出した異彩を放ち、注目を集めました。この時期の彼女の作品は音や電気の明滅、あるいは時間といった非物質的な素材を、従来の美術表現にとらわれることなくその存在のありようをもっとも際立たせる方法で抽出したのです。

さらに彼女はこうした試みを絵画において表現すべく、電気服の電球と配線に対応する円と線から成り立ったおびただしいヴァリエーションの絵画群を生涯描き続けます。彼女の歩みはある時は極端にラディカルな展開があり、あるときは淡々とした繰り返しのように見えますが、すべて一つ一つの作品がつながりあった新たな実験でした。

具体をはじめとして、日本の戦後現代美術への再評価の気運が高まっていますが、田中敦子は没後の Documenta12(2007年)でも大きく特集されるなど、とりわけ重要視されています。本展は作家自身の監修のもとに再制作された《作品》（ベル）、《電気服》をはじめとした代表作約100点で構成され、革新性を模索し続けた彼女の歩みを回顧します。

本展の見どころ

■ 「具体」、「フルクサス」、「実験工房」

この冬のMOTは日本の現代美術のキーワードを理解する展覧会が同時開催。

■ 世界が賞賛した田中敦子

本展はイギリス、スペインを巡回した凱旋展になります。展覧会初日には各施設のディレクターを招いた特別関連トークも開催致します。

■ ベル、電気服からタブロー

視覚だけではとらえきれない刺激を展覧会場で展開し、さらにそれを絵画化した田中敦子。

主要作品を網羅した約100点の回顧展で田中敦子の世界観を体感して頂けます。

■ 2011年と田中敦子をつなぐ

松井紫朗、河合政之、上地由衣の新作展示。

Connecting to Atsuko Tanakaと題してライブやドキュメンタリー作品「田中敦子 もうひとつの具体」の上映など盛りだくさんの関連プログラムを実施します。

展覧会によせてーなぜいま田中敦子なのか？

いま世界が「具体」などの日本の前衛アートに注目しています。戦後、欧米の前衛芸術に刺激を受けながら、「今までに見た事のない」新しい芸術をつくろうとした、ストレートでみずみずしい感覚とエネルギーがそこにあふれているからです。中でも田中敦子は、具体グループの中の女性作家として突出した才能をみせました。前衛の女性作家として、オノヨーコや草間彌生が自由を求めてニューヨークに行き、そこで評価されたのに対し、田中は日本に留まり、自分の表現を模索しつづけました。ドクメンタの電気服の展示で注目を集めたのにはじまり、昨年はMOMA所蔵の大作が大きく特別展示としてフューチャーされるなど、「遅咲きの花」のようにその評価は高まりつつあります。

布が風にはためく様から音が空間をめぐるベルを発想し、さらにネオンの点滅から電気服を発想するなど、音や光を使った、50年代の田中の発想の飛躍と豊かさは比類なきものです。「いままでにみたこともないものをつくりたい」華奢な身体に秘められたその強い意思是、2011年に生きる私たちに生き活きとつたわってきます。

ネットワークで世界がつながる現在、電球の明滅、一つ一つの惑星、命の明滅を円であらわし、それをひたすらつないでいった、ネットワーク絵画は予言的ともいえます。アートオブコネクティング、一つの絵画ではなくそれが複数、空間を満たす事でお互いがシンクロしはじめます。田中敦子は現在にむけて、メッセージを発し続けているのです。

東京都現代美術館 チーフキュレーター
長谷川祐子

田中敦子のことば

53年、入院したとき、退院の日をまちわびて描いた日付をクレヨンでふちどりをしたとき、「これが絵画だ」という認識の到来は、ありふれた数字、それは抽象的な記号であるが、彼女の眼にそれが「抽象」への入り口と映った瞬間である。
(本展図録：長谷川祐子のテキストより)

「制作中最も興味深く思うのは電球を点滅させる事で、モーターで点滅器を回転させると、自分のセットした電球が人間の手で造られない様な異常な美を見せてくれる事である。」¹

「医学や科学などがすごく発達しているし、火星に行こうかという時代になっていますので、それに共存できるような芸術をしたいと思います」。²

「新しく発表される美術作品は、現在数多くある作品に異なった新しい美を表現していなければならぬ。既に提示された美を、再び繰返して提出することは、職人的な手仕事の類であって、美術を行おうとする者は未だに提示されていない美を発見し、定着することが責任であると思う。」³

「小細工をするとかえって本当のものがでないのです。キレをどう扱うか、一番自分らしく扱うにはどうすればよいかを考えた結果の作品です。私は普通の絵を一けたふみはずしたものを作りたいのです」⁴



- ① 田中敦子「作品11 舞台服」『具体』第7号、具体美術協会、1957年7月15日
- ② 2004年にインタビューに答えた田中の言葉 | 田中敦子自作を語る 2003年8月19日 静岡県立美術館におけるインタビュー記録 田中敦子展教育普及プログラム記録集 静岡県立美術館 2003年 p15
- ③「田中敦子年譜」『田中敦子 未知の美の探求 1954-2000』展図録 2001年 戸屋市美術館 (初出：『芸術新潮』第11巻第1号、1960年1月1日、pp.271-272)
- ④「田中敦子年譜」『田中敦子 未知の美の探求 1954-2000』展図録 2001年 戸屋市美術館 (初出：「戸屋市展の変わり種を拾う」『毎日新聞』1955年6月9日)

画像：第3回ゲンビ展 (京都市美術館、1955年11月) で《作品》を設置する田中敦子
©Ryoji Ito

作家略歴

田中 敦子

- 1932年 大阪市に生まれる。
- 1951年 京都市立美術大学（現在の京都市立芸術大学）入学、同年中退。
- 1953—54年 体調を崩して病院に入院。その間に、退院の日を待ちわびて数字を順に描く。退院後、《カレンダー》として作品化。
- 1954年 O会展に《カレンダー》を出品。
- 1955年 春頃、具体美術協会会員に入会。
「真夏の太陽にいだむ野外モダンアート実験展」（芦屋公園）で10m四方のピンクの人絹地を張った作品などを出品。
第1回具体美術展（東京 小原会館）に《作品》（ベル）を出品。
- 1956年 第2回具体美術展（東京 小原会館）に《電気服》と、それに基づいた素描20点を出品。
- 1957年 「舞台を使用する具体美術」展（大阪 産経会館）で《電気服》ほかを使用したパフォーマンスを行う。フランスの批評家ミシェル・タビエの紹介などで、「具体」が世界で認知されるなか、その独特な田中の作品は注目を集める。
- 1986年 Centre George Pompidou(パリ)の「JAPON DES AVANT GARDES 1910-1970」で主要作品が紹介される。
- 2001年 芦屋市立美術博物館、静岡県立美術館で初回顧展「田中敦子 未知の美の探求 1954—2000」開催。
- 2004年 Grey Art Gallery(ニューヨーク)ほかで回顧展。
- 2005年 12月死去。73歳。
- 2007年 Documenta12(ドイツ カッセル)のFridericianum Museumで主要作品が特集展示される。
- 2011年 IKONギャラリー（イギリス バーミンガム）、カスティジョン現代美術センター（スペイン ヴァレンシア州）、東京都現代美術館で「田中敦子—アート・オブ・コネクティング」が開催。

関連イベント—Connecting to Atsuko Tanaka

黎明期の日本現代美術界を体当たりで疾走した田中敦子。瑞々しい彼女の作品は彼女の生きた時代と「今」とをどのように結びつけているのか。美術史家、アーティストらによるトーク、展示、パフォーマンスから再考します。

1～5の会場等はいずれも以下のとおり。日時等の詳細は当館HPにてご確認くださいませ。

会場：東京都現代美術館 講堂（地下2階） | 定員：200名（先着順） | 参加費：無料

1. 日本展オープン記念トークセッション「田中敦子のつないだもの」 ※日本語の逐次通訳あり。

講演者： ジョナサン・ワトキンス（アイコンギャラリー ディレクター）
ロレンサ・バルボニー（カスティジョン現代美術センター ディレクター）
長谷川祐子（東京都現代美術館 チーフキュレーター）
モデレーター： 関昭郎（東京都現代美術館 シニアキュレーター）

2. 上映会 ドキュメンタリー「田中敦子 もうひとつの具体」

3. トーク ドキュメンタリー「田中敦子 もうひとつの具体」監督による

講演者： 岡部あおみ（美術評論家）

4. ライブ 河合政之with浜崎亮太

5. トーク「光と熱を描く人/田中敦子と金山明のために」

出演： 森村泰昌（写真家） × 加藤瑞穂（大阪大学総合学術博物館招聘准教授）

6. 特別展示 | Connecting to Atsuko Tanaka 企画展示室2階ほか

出品作家： 松井紫朗、河合政之、上地由衣

展覧会情報

展覧会タイトル：	田中敦子 —アート・オブ・コネクティング
会場：	東京都現代美術館 3F
会期：	2012年2月4日（土）～5月6日（日）
休館日：	月曜日（4月30日は開館）、5月1日
開館時間：	10:00 – 18:00（入場は閉館の30分前まで）
主催：	公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都現代美術館、国際交流基金
特別助成：	財団法人 石橋財団
協力：	N E Cディスプレイソリューションズ株式会社
観覧料：	一般1,000円（800円） 大学生・65歳以上800円（640円） 中高生500円（400円） 小学生以下無料 ※（ ）内は20名様以上の団体料金 ※本展チケットで「MOTコレクション」もご覧いただけます。
キュレーター：	ジョナサン・ワトキンズ（アイコンギャラリー ディレクター）
コ・キュレーター：	<日本側実行委員> 加藤瑞穂（大阪大学総合学術博物館招聘准教授） 河崎晃一（兵庫県立美術館企画・学芸部門マネージャー 館長補佐） 長谷川祐子（東京都現代美術館 チーフ・キュレーター） <スペイン側> ロレンサ・バルボーニ（カステジョン現代美術センター ディレクター）
担当学芸員：	関昭郎（東京都現代美術館 シニア・キュレーター）
同時開催：	「爨嘔 ふたたび虹のかなたに」 2月4日 – 5月6日 「MOTコレクション クロニクル 1960s OFF MUSEUM」 2月4日 – 5月6日 「ブルームバーグ・パヴィリオン・プロジェクト」 2012年10月まで ■ Qosmo/テクノ手芸部 2月4日 – 3月4日 ■ 小林史子 3月24 – 4月22日 ■ カンパニー・デラシネラ・パフォーマンス 5月6日
展覧会カタログ：	2012年2月4日 発売 定価2000円（税込） 日英カラー：222 ページ
お問合せ：	東京都現代美術館 〒135-0022 東京都江東区三好4-1-1 Tel. 03-5245-4111 / www.mot-art-museum.jp

広報用画像

広報用として表紙の画像《電気服》のほか、下記6点がございます。
掲載ご希望の方はお手数ですが別紙にご記入の上、FAXもしくはメールにてご連絡ください。



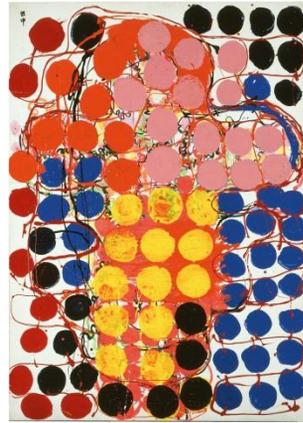
① 田中敦子《金のWork A》1962年
所蔵・写真提供：千葉市美術館 ©Ryoji Ito



② 田中敦子《「電気服」に基づく素描》1956年
所蔵・写真提供：金沢21世紀美術館
撮影：中道淳/ナカサアンドパートナーズ ©Ryoji Ito



③ 田中敦子《地獄門》1965-69年
所蔵・写真提供：国立国際美術館 ©Ryoji Ito



④ 田中敦子《作品》1957年
所蔵・写真提供：芦屋市立美術博物館 ©Ryoji Ito



⑤ 田中敦子《作品 (6)》1955年
所蔵・写真提供：東京都現代美術館 ©Ryoji Ito



⑥ 田中敦子《Thanks Sam》1963年
所蔵・写真提供：千葉市美術館 ©Ryoji Ito

FAX. 03-5245-1141

本展覧会広報用素材として、作品画像7点をご用意しております。

ご希望の際は下記申込用紙に必要事項をご記入の上、ファックス又はEメールにてお申込みください。

なお、写真の使用に際し、以下の点をご注意ください。

① キャプションは、作家名、作品名、制作年、撮影者等を必ず表記ください。

② 作品のトリミング、文字載せはお控えください。

本展記事を紹介頂く場合には、恐れ入りますが情報確認の為の校正、掲載誌（紙）、DVD、CD等をお送りください。

また読者様・視聴者様へのプレゼント用招待券もご手配可能ですので、ご希望の場合はお申し付けください。

媒体名： 『 _____ 』

○印をおつけください

種 別： TV ラジオ 新聞 雑誌 フリーペーパー
ネット媒体 携帯媒体 その他

発売・放送予定日： _____

御社名： _____

ご担当者名： _____

Eメールアドレス： _____

@ _____

(〒 _____)

ご住所： _____

お電話番号： _____

FAX： _____

図版番号： ご希望の図版番号に ✓ をおつけください。

- 表紙画像 田中敦子《電気服》1956年（1986年再制作）所蔵・写真提供：高松市美術館 ©Ryoji Ito
- ① 田中敦子《金のWork A》1962年 所蔵・写真提供：千葉市美術館 ©Ryoji Ito
- ② 田中敦子《「電気服」に基づく素描》1956年 所蔵・写真提供：金沢21世紀美術館
撮影：中道淳/ナカサアンドパートナーズ ©Ryoji Ito
- ③ 田中敦子《地獄門》1965-69年 所蔵・写真提供：国立国際美術館 ©Ryoji Ito
- ④ 田中敦子《作品》1957年 所蔵・写真提供：芦屋市立美術博物館 ©Ryoji Ito
- ⑤ 田中敦子《作品(6)》1955年 所蔵・写真提供：東京都現代美術館 ©Ryoji Ito
- ⑥ 田中敦子《Thanks Sam》1963年 所蔵・写真提供：千葉市美術館 ©Ryoji Ito

読者様プレゼント用招待券をご希望の場合は ✓ をおつけください。 10名様 | 20名様